

真宗研究 第五十六輯 抜刷
平成二十四年一月三十日

金沢文庫蔵 『浄土論注要文抄』の諸問題

佐竹真城

金沢文庫蔵『浄土論注要文抄』の諸問題

本願寺派 佐竹真城

問題の所在

現在、神奈川県立金沢文庫には、『浄土論注要文抄』（以下『要文抄』と略称）と仮に名づけられた一書が所蔵されている。本書は曇鸞の『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下『論註』と略称）の本文を短く、「……等事」として項目立てにし、それに関して経論の引用や私釈を加えながら註釈が施されている。このことから、『論註』の註釈書であることが知られながらも、首題や撰号を欠いており、これまで研究者の間で十分に検討されて来なかった。

今日までの少ない研究によると、本書は法然（一一三三—一二二二）の門弟である覚明房長西（一一八四—一二二六）の著作と推定され、『論註疑芥』とか、『論註上卷釈』などと仮称されている。『論註疑芥』の仮称は、金沢文庫より検出された長西の著作に、「浄土疑芥」とあるのに依つたもののように、『論註上卷釈』の仮称は、本書が『論註』の上巻分の註釈であることに依ると考えられる。両名からして、一見すると別々の著作と思えるが、諸研究の解説から判断して金沢文庫所蔵の『要文抄』を指していることは間違いない。ところが、残念なことに撰者を長西とするに至った明確な根拠が示されていないのである。

前述した理由から、筆者は当初、撰者を中心に検討していたが、その過程において、そもそも本書を『論註疑芥』と同一視することは誤りであることがわかってきた。これは今後の長西研究において大変重要な問題と考える。本稿では、『要文抄』の撰者問題を念頭に置きながら、本書が如何なる価値を有するかを考えてみたい。

一、『要文抄』の書誌情報

『要文抄』に関する書誌情報は以下の通りである。

【資料名】	浄土論注要文抄上・下（仮題）
【書写年代】	鎌倉時代（一二六九年）
【装 幀】	卷子装（軸有り・改装後）
【紙 量】	「巻上」：一七紙、一紙あたり「縦」約二七センチメートル・「横」約四〇センチメートル、一行約二六文字・三三三行程度 「巻下」：二八紙、一紙あたり「縦」約二七センチメートル・「横」約四〇センチメートル、一行約二七文字・三三三行程度
【本文】	漢字（仮名交じり）
【訓 点】	
【註記等】	有り（墨書による返り点・送り仮名・合符・註記）

【奥書】	文永六年八月廿八日子時□□一条万里小路也
【備考】	<p>①目録番号：「上巻」三〇六一五、「下巻」三〇六一六。</p> <p>②巻下の一紙目手前に「コ、へ入ル」との朱書あり。</p> <p>③同じく巻下の四紙目と五紙目の間に「コ、へ入レル」との朱書あり。</p> <p>※②・③どちらも近代になって書き入れられたものであろう。</p>

二、『要文抄』に関連する研究

本書に関連する研究はそれほど多くないが、今日までの研究状況を整理・把握しておきたい。管見の限りでは、以下の研究が挙げられる。

①石橋誠道著『九品寺流長西教義の研究』（一九三七年）

長西の著作一覽を挙げる中で、書名を『往生論註疑芥』、撰者を長西と推定し、金沢文庫に所蔵されていることを紹介するが、そのほかに特別言及することはなく、教義を論じる上でも他の著作を中心とし、本書を用いての検討はしていない。また、長西の流派名でもある「九品寺」の位置について論じる際に、本書の奥書にも記される「一条万里小路」¹⁾に言及する程度である。

②戸松憲千代稿「元興寺智光無量寿経論釈抄」(『宗学研究』巻二四所収・一九四二年)

『長西論註鈔』と呼称し、金沢文庫の実物ではなく大谷派宗学院所蔵の写真四〇枚を元に、本書に見られる「智光云」を抽出して、智光(七〇九―七八〇?)の『無量寿経論釈』の復元を主題としたものである。智光

教学の研究に好個の材料であるということに重点が置かれるが、「内容より推定して長西の撰述たることに間違ひはないやうである…中略…筆格がかの観経疏光明抄や法事讃光明抄等のそれと同一なるより、永源の筆なることが推定せられる」と述べて、内容や筆画より本書を長西の撰述と推定するほかは、本書についての言及はない。

③ 石田充之著『日本浄土教の研究』（一九五二年）

著作一覽に「論註上卷釈（卷子本二卷存）（金沢文庫蔵、龍大写真蔵）」と挙げ、「第四の『観経疏光明抄』以下第八の『群疑論疑芥』に至る五著はいずれも一連の『浄土疑芥』と内題する講義録と推測されるもの…」⁽³⁾と解説しているが、その教義内容には触れていない。

④ 安井広度著『法然門下の教学』（一九六八年複刊、一九三八年初刊）

著作の一覽に「浄土疑芥」という項目を立て、その中で「『論註』等の鈔を残している」と述べている。そして、長西における「業成論」を説明するにあたり、わずかではあるが本書を引用して教義を論じている。⁽⁴⁾

⑤ 浄土宗大辞典編纂委員会編『浄土宗大辞典』卷三（一九七六年）

著作一覽に「論註上卷釈」と挙げるが、①・③の両書を参考文献として記載する。

⑥ 石田充之著『法然上人門下の浄土教学の研究』卷下（一九七九年）

著作一覽に、「論註上卷釈（卷子本二卷存）」と名称を挙げ、脚註に「金沢文庫蔵、龍谷大学等写真蔵」と所在を示し、「第四の『観経疏光明抄』以下、第八の『群疑論疑芥』に至る五書はいずれも一連の『浄土疑芥』と内題する長西の講義録と推定されるもので…」⁽⁶⁾と解説しているが、③と同様に教義内容には触れていない。

⑦ 服部純雄稿「智光撰『無量寿経論釈』稿（復元資料）」（『浄土宗学研究』卷一五、一六・一九八二年）

戸松氏の論攷を引用して書名を挙げるも、本人は未見であると述べており、内容には触れていない。⁽⁷⁾

⑧吉田淳雄稿「長西の著作について」（『仏教論叢』巻四四・二〇〇〇年）

長西の著作を解説していく中で、⑥の石田氏の説に依って『論註上卷釈』と呼称する。実際に金沢文庫へ調査に行ったが、当該典籍を確認することが出来なかつたという。⁽⁸⁾なお、継続して調査を進めると述べているが、以後新たな成果は報告されていない。

諸研究のまとめ

これらの諸研究を鑑みれば、本書は『論註疑芥』や『長西論註抄』、あるいは『論註上卷釈』と仮題にて呼称され、撰者を長西と推定していることがわかる。しかし、長西の著作という点よりも、智光の『無量寿経論釈』の佚文が多く見られるという点に価値を見出され、安井氏を除いてその内容にはほとんど見向きもされていない。その安井氏も、本書を用いて思想を論じてはいるが、翻刻に不十分な点があり、存分に活用・検討ができていないと言えない。

以上が『要文抄』に関連する研究の現状である。このように十分な研究がされていないのは、本書が経論の引用を中心に成り立っている、いわば単に経論の文言を収集した「要文集」のように見なされているであろうことが一つの要因と考えられる。しかしながら、筆者は本書が『論註』註釈史上において重要な位置にあると考えるので、現状の評価に対して疑問を抱いている。したがって、以下、『要文抄』が本来どのように評価されるべきものなのかを考察したい。

三、『要文抄』の特徴

『要文抄』が従来、その引用経論の多さから「要文集」的な性格を持つ書物として扱われてきたように思えることは、前述した通りである。しかし、検討の結果、必ずしもそうとは言えないことがわかってきた。そこでまず、『要文抄』が撰述された当時に、本書がどのように扱われていたのかを窺ってみたい。

I 『要文抄』の扱い

東大寺知足院の悟阿（?—一二八三）が撰述した『論註刪補鈔』（以下『刪補鈔』と略称）全一二卷(9)の中で、「有抄（鈔）云」として引用する典籍の中に、『要文抄』の文言と一致する文が見られる。具体的な数字を挙げれば、『刪補鈔』の『論註』上巻註積分に当たる巻一から巻六には、「有抄（鈔）云」が一七九例あり、そのうち五〇例にも及ぶ(10)。その一例を示せば次の如くである。

『要文抄』

尋云花嚴八十云於四事不能化一根二心三心所四業及果報（文）瑜伽九十八云此四法以聖者神通力不及也（法相名目引之）而今何以神力令生道心乎答會之以神力四法不及等者而依余說不依如來也唯識論第十云由此經說化無量類皆令有心（云云）（此經者涅槃經也）又同論云無上覺者神力難思故能化現無形質法等（文）

『刪補鈔』

有鈔尋云華嚴八十說於四事不能化一根二心三心所四業及果矣（文）瑜伽九十八云此四法以聖者神通力不及也（法相宗名目引之也）而今何以神力令生道心耶答會曰以神力四法不及等者而依余說不依如來也唯識論第十云由此經說化無量類皆令有心（云云）（此經者涅槃經也）又同論云無上覺者神力難思故能化現無形質法矣

演秘第七引論云若加被他令愚昧者解甚深法令失念者
得正憶念名化他心(文)

(卷下・二二六—二三一)行⁽¹²⁾

僕陽師云若加被他令愚昧者解甚深法令失念者得正憶念
名化他心(文)

(卷四・三七丁左—三八丁右)

対照してみると一目瞭然だが、本文はもちろん、割註までもがほぼ一致する。そして、不一致の箇所も、言い様が異なるだけで述べていることに相違はない。

今回は一例を示したに過ぎないが、悟阿においてはかなりの数が引用されているから、当時は少なからず注目・流伝していたと言えよう。そして、そのことから、『要文抄』が単なる個人の「要文集」に止まるのではなく、『論註』を註釈する上で重要視されねばならない書物であったことが知られ、本書の評価を見直す必要が感じられるのである。

Ⅱ 『要文抄』の引用経論

次に、『要文抄』に引用される典籍からその特徴を見ていきたい。

本書は『論註』を註釈する上において、多くの経論を引用している。以下、煩を厭わずに、その経論名と引用回数を一挙してみたい。

【インド・中国(順不同)】

● 『無量寿経』(二回)

● 『観無量寿経』(一回)

● 『平等覚経』(一回)

● 『観音授記経』(一回)

● 『大乘同性経』(一回)

● 『大乘顕識経』(一回)

- 『大般涅槃經』(二回)
- 『維摩詰經』(一回)
- 『大悲經』(一回)
- 『文殊師利問經』(一回)
- 『十輪經』(一回)
- 『大般若經』開題(一回)
- 『俱舍論本頌』(一回)
- 円暉『俱舍論頌疏』(七回)
- 『雜集論』(一回)
- 『撰大乘論釈』(四回)
- 『仏性論』(一回)
- 『有部毘奈耶』(一回)
- 『成実論』(三回)
- 智周『唯識論演秘』(一回)
- 『十住毘婆沙論』(六回)
- 惠影『大智度論疏』(二回)
- 法藏『起信論義記』(七回)
- 湛然『玄義釈籤』(一回)
- 智顛『法華文句』(六回)
- 『六十卷華嚴經』(一回)
- 『勝鬘經』(一回)
- 『悲華經』(三回)
- 『文殊般若經』(一回)
- 『雜阿含經』(一回)
- 『大莊嚴論經』(一回)
- 『俱舍釈論』(二回)
- 法宝『俱舍論疏』(一回)
- 『大宝積經論』(一回)
- 『仏地經論』(一回)
- 天親『浄土論』(二回)
- 『十誦律』(一回)
- 基『唯識論掌中樞要』(二回)
- 『唯識三十頌』(一回)
- 『中論』(五回)
- 僧侃『大智度論疏』(一回)
- 法藏『起信論別記』(一回)
- 智顛『摩訶止観』(一回)
- 湛然『文句記』(三回)
- 『維摩詰所問經』(四回)
- 『首楞嚴經』(一回)
- 『弥勒所問經』(一回)
- 『仏本行集經』(二回)
- 『菩薩地持經』(一回)
- 『俱舍論』(八回)
- 普光『俱舍論記』(五回)
- 法盈『俱舍論頌疏序記』(一回)
- 『撰大乘論』(一回)
- 『十地經論』(一回)
- 『法華論』(一回)
- 玄奘『毘尼討要』(一回)
- 基『唯識論述記』(二回)
- 『瑜伽師地論』(八回)
- 『大智度論』(一七回)
- 『大乘起信論』(六回)
- 智顛『法華玄義』(八回)
- 湛然『止観補行伝弘決』(五回)
- 從義『三大部補註』(二回)

- 道暹『文句補正記』(一回)
- 『法華玄贊要集』(一回)
- 智顓『維摩經略疏』(一〇回)
- 法藏『華嚴探玄記』(一回)
- 行滿『涅槃經疏私記』(三回)
- 灌頂『觀音義疏』(二回)
- 元照『資持記』(一回)
- 太賢『梵網經古迹記』(二回)
- 宗密『孟蘭盆經疏』(一回)
- 元照『孟蘭盆經疏新記』(二回)
- 義寂『大經述義記』(二回)
- 淨影『大經義疏』(二回)
- 道綽『安樂集』(三回)
- 善導『往生禮讚』(一回)
- 宗暁『梁邦文類』(二回)
- 元照『小經義疏』(二回)
- 基『西方要決疑通鏡』(一回)
- 延壽『宗鏡錄』(三回)
- 道世『諸經要集』(一回)
- 玄奘『大乘百法明門論』(一回)
- 『正理論抄』(一回)
- 『付法藏因縁伝』(二回)
- 道宣『統高僧伝』(二回)
- 智光『無量壽經論釈』(二二回)
- 最澄『守護国界章』(一回)
- 円珍『法華論記』(一回)
- 源信『阿弥陀経略記』(一回)
- 真興『唯識義私記』(三回)
- 永観『往生拾因』(一回)
- 貞慶『唯心念仏』(一回)
- 明恵『華嚴信種義』(二回)
- 智顓『維摩經玄疏』(二回)
- 灌頂『涅槃經疏』(四回)
- 道宣『行事鈔』(一回)
- 『菩薩戒義疏』(一回)
- 義寂『大經義疏』(三回)
- 淨影『觀經疏』(二回)
- 懷感『群疑論』(二回)
- 円測『小經疏』(一回)
- 飛錫『念仏三昧宝王論』(一回)
- 義忠『百法論疏』(一回)
- 玄奘『大唐西域記』(三回)
- 『学生式問答』(一回)
- 円源『俱舍私抄』(一回)
- 藏俊『大乘法相宗名目』(二回)

【日本(撰述年順)】

如上、実に様々な経論が引用されており、撰者の博識ぶりが窺われるが、その中でも特に注目すべきものが数点

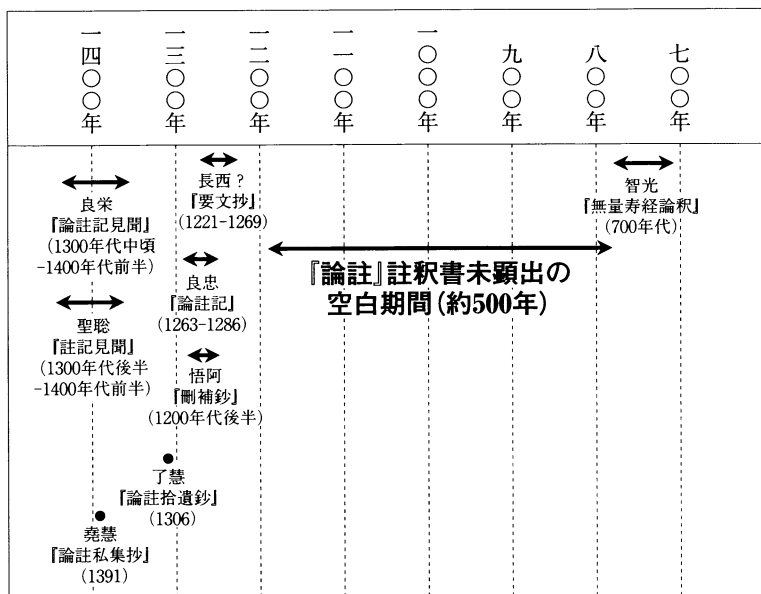
ある。

第一には、智光の『無量寿経論釈』である。今日、多くの研究者によって復元されているが、長らく散佚していたものである。前述の通り、既に戸松氏に指摘されているが、『要文抄』は『無量寿経論釈』を多く引用しており、智光研究の格好の材料と言うことができる。その数は、戸松氏は一六回と指摘したが、筆者が翻刻した資料によれば、それを超える二一回もの引用が確認出来た。

次に注目すべきは、当時において最新とも言える研究を取り入れている点である。たとえば明恵(一一七三—一二三二)が撰述した『華嚴信種義』であり、あるいは貞慶(一一五五—一二三二)が撰述した『唯心念仏』である。『華嚴信種義』は、撰述年が一二二一年とされているから、書写年が一二六九年である『要文抄』が撰述された当時には、比較的新しい書物であったことは想像に難くない。何より、『華嚴信種義』が引用されることによって、『要文抄』の撰述年の範囲が大きく狭まることになるのは重要な点である。すなわち、上限が一二二一年、下限が一二六九年となり、『要文抄』の撰述年をこの五〇年内に求めることが出来るわけである。

また、『唯心念仏』に関しては撰述年こそ明らかでないが、貞慶の生没年より考えて『華嚴信種義』より少し早い成立になる。よって、当時においては新しい書物と言つて良いであろう。実は、鎮西義の第三祖良忠(一一九九—一二八七)が撰述した『往生論註記』(以下『論註記』と略称、一二六三年草稿・一二八六年重訂¹³)にも、『華嚴信種義』や『唯心念仏』が註釈に使用されていることがわかっている。『要文抄』と『論註記』はほぼ同時代の成立と考えられるから、同文を引用して解釈する点は、当時の『論註』註釈における一つの方向性を見て取ることができ、且つ両書の関係に興味深いものがあるように思えてくる。

上述の点を考慮すれば、『要文抄』は、智光より始まる日本の『論註』註釈に最新の研究を反映し、後世に繋がる新たな方向性を示したものと言えよう。よって本書は、『論註』註釈書として十分な価値を有していると言つて



も過言ではない。

以下、参考までに現存する資料より判明する、日本の『論註』註釈史を図表にまとめておいた。⁽¹⁴⁾ これを見れば、これまでに述べてきたことがより明確になろう。

四、『要文抄』撰者長西説の検討

次に、諸研究が『要文抄』の撰者を長西と推定することについて、二、三検討を加えてみたい。『要文抄』は、従来長西撰述の『論註疑芥』などと仮称されてきたが、そもそも目録類からは長西に『論註』註釈書があったことは確認できず、撰者を長西と推定した根拠も明確ではない。従って、長西に『論註』註釈書があったのか、また、本当に『要文抄』は『論註疑芥』なのかをも含めて、『要文抄』の撰者に関する問題を考えてみたい。

i 堯慧と聖聡の説を通して

まずは、第三者の説を手がかりとして考察してみたい。管見の限り、二人の大師の著作において、『要文抄』

の撰者問題を検討するにあたっての興味深い記述が確認出来た。

第一には、西山深草派の堯慧善偉（?—一三九五）が著した『往生論註私集鈔』（以下『私集鈔』と略称）である。その巻三には、「刪補抄云、有抄云……」⁽¹⁵⁾とあり、『刪補鈔』が引用されるが、その「有抄云」の右傍には「九品寺也」（傍点は筆者の加筆）と註記されているのである。この「九品寺」は、周知のように長西の流派名であるから、長西の説を指していると考えられる。しかしながら、『要文抄』にはここに示される内容と一致する文言は見られない⁽¹⁶⁾。

第二には、鎮西義の聖聡（一三六六—一四四〇）が、良忠の『論註記』を註釈した『註記見聞』である。その巻一には、

有云、者、本願義覚明房義也。

（『浄全』巻一・三四四頁下）

と記されている。これは、良忠の『論註記』に、

有云、優婆提舍唯局長行願生偈言但在偈頌。此義不然。偈云我依修多羅等、註云成優婆提舍名。
〔已上〕

（『浄全』巻一・二五七頁上）

と述べられる箇所を註釈したものである。聖聡によれば、良忠が「有云」として批判する相手が覚明房、すなわち長西であると言うから、長西に『論註』註釈書があったことの示唆と考えて良いであろう。よって、『要文抄』が従来言われるように長西の『論註』註釈書であるとするならば、良忠が批判している内容が見られることになる。ところが、「優婆提舍を長行だけに限定し、願生偈を偈頌だけに限定する」という説は『要文抄』から看取することは出来なかった。

このように、第三者の説を手がかりとした場合、『要文抄』を長西の『論註』註釈書と見ることは難しいように思えるのである。